

安成通信 2017/01/16 「雪国」はどう変わるか



今冬最強の寒波が日本列島に大雪をもたらしています。山間部の多いところでは2 m以上の積雪が報じられており、京都市内でも15日朝で13 cmでした。地球研周辺は20 cmを超えているようです。気象庁のレーダーアメダス画像で見ると、日本海で発達した雪雲が丹波の山々を越えて次々に京都盆地に流れてくる様子がよくわかります。

平地でも大雪が降る日本海側の「雪国」は、日本列島がシベリアの寒気団が直接南下して来やすい東アジアに位置することと、大気より暖かい対馬暖流が流れる日本海が風上側にあることの二つの地理的・物理的な条件により成立しており、世界のどの地域にも類を見ません。冷たく乾いた大陸からの大気は、日本海上を吹き渡る時たっぷり熱と水蒸気を供給されて次第に不安定になり、雪雲を発生させます。雪雲は日本列島に近づくほど発達し、日本海沿岸に時として大雪をもたらします。やや逆説的ですが、海面が低かったため日本列島が大陸と陸続きとなっていた氷河期には、日本海は冷たい湖であったため雪はあまり降らず、約1万年前に最終氷期が終わり、暖かい完新世に入って、はじめて大雪を伴う「雪国」が現れたわけです。

雪国では、冬の雪が年間降水量の半分以上を占める地域が多く、雪は重要な水資源ともなっています。冬の積雪と春の融雪を伴う「雪国」特有の自然条件は、ブナを代表とする森林生態系を育んできました。カシ・コナラ・クリなどの堅果を実らせるブナ科植物を含むブナ林生態系を活用した「ブナ帯文化」（市川、1987；梅原他、1995 など）は、西日本の照葉樹林文化（上山、1969；上山・佐々・中尾、1976 など）に対し、雪国を中心にした東日本の縄文文化の基層となっているとされています。万葉時代以降も、「雪月花」といわれるように、雪は日本人の心に生き続ける自然（あるいは風土）の一部となっています。

さて、現在進みつつある「地球温暖化」は、「雪国」をどう変えるのでしょうか？ 日本列島は北緯約35度の中緯度に位置し、雪国である北陸・東北地方の冬の平均気温は平地で0℃～3℃程度です。雨か雪かの分かれ目となる気温は2～3℃前後ですから、少しの「温暖化」でこれらの地域は「雪国」ではなくなってしまう可能性があります。一方で、IPCC（気候変動に関する政府間パネル）は、今世紀末に向けて、特に北極地域の気温上昇が著しく大きくなると予測しています。その北極地域の温暖化（と中緯度の相対的な寒冷化）に伴う大気循環の変化（メディアのことばでは「偏西風の蛇行」）によっては、日本列島にシベリアからの寒気が現在以上に流れやすくなり、より暖かくなった海流とも相まって、特に気温が低い山間部では、むしろ雪が増えて「超雪国」となるような冬が出現する可能性も否定できません。「地球温暖化」の影響は、平野と山間部という地域レベルでも異なるかたちで現れうることに、私たちは留意する必要があります。

参考文献：

市川健夫（1987）：ブナ帯と日本人．講談社現代新書

梅原猛他（1995）：ブナ帯文化．新思索社

上山春平（1969）：照葉樹林文化．中公新書

上山春平・佐々木高明・中尾佐助（1976）：続・照葉樹林文化．

中公新書

